

---

**インフィニットストラトス 白の消失、黒の出現**

ケン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニットストラトス 白の消失、黒の出現

### 【Nコード】

N5542X

### 【作者名】

ケン

### 【あらすじ】

最近、自分の成長に焦りを感じ始めてきている一夏。気分を変えようと外出するがそこで一人の女性に出会う。この出会いが一夏の人生そのものをかえるとはまだ、誰も知らなかった。



「……」

少女達は今までの事を指摘され何も言い返せなかった。

「それに貴方もよ、織斑千冬」

「何？」

「貴方は彼に期待していたみただけど、その期待の仕方が、尋常じゃなかった。いや、期待しすぎたと言っべきかしらね」

「……」

「凶星だろ。だから俺はお前たちに敵対する。この力でな！」

彼が纏っている黒いISから黒い炎のような物が噴き出し始めた。

「あ、あれは」

「これが俺の憎しみの姿だ！」

辺りが黒い炎のような物で包まれた。

## プロローグ（後書き）

こんにちは、ケンです。まだ別の連載作が終わってない中での連載です。更新は遅くなります。では、よろしくお願ひします。

## 第一話 日常

「いくぞ！一夏！」

「ああ、来い！」

少年と少女がアリーナでIS同士による模擬戦を行っていた。

IS、それはとあるマッドな天才発明家により世に出された、最強の兵器。

IS学園、そこはIS操縦者を育成する世界唯一の学園である。

ISと言うものは本来、女性にしか扱えないパワードスーツ

それにより、世界は男尊女卑から、女尊男卑に近いものへと変わった。

世界共通の常識は「ISは女にしか使えない」

しかし、その世界の常識を根底からぶち破った少年がいる。

その名は織斑一夏。

あの世界最強と謳われている初代ブリュンヒルデ、

織斑千冬の実の弟である。

「おおおおお」

一夏が雪羅のカノンモードを撃った。

「甘いぞ！一夏！そんな物、そうやすやすと当たらんぞ！」

「分かってるよ！行くぜ篤！」

一夏と闘っている少女は篠ノ之篤。

先程紹介した、天才マッド発明家の篠ノ之束の妹である。

これは少年、織斑一夏の物語である。

「また、負けた」

「ふん、鍛錬が足らんぞ！一夏！男が女に負けてどうする！」

先程の勝負は箒が勝ったようだ。

「へえへえ。そうでございますね」

「で、では、さっき言っていた事だが・・・」

「ああ、買い物だっけ？良いぜ、付き合っよ」

「そ、そうか！そうか、うん、うん」

少女は嬉しそうに顔を緩めた。

この少女、実は一夏に恋をしているのだ。

「じゃあ、もう今日は帰ろうぜ？」

「うむ！そうだな」

食堂

「あら、一夏さん」

「ああ、セシリアか」

「あたしもいるわよ！」

「ああ、鈴木」

今、一夏に話しかけてきたのは、

セシリア・オルコット、鳳鈴音である。

二人は代表候補生でもある。

「先程まで、訓練をしていたんですの？一夏さん」

「ああ、まあな。負けたけど」

「あんた、また負けたの？最近、勝ち星挙げてくない？」

「うるせえ」

だが、実際そうだった。

最近は専用機を持ち始めて間もない箒に負けている。

逆に箒は代表候補生にも徐々に勝ち始めてきている。

今、専用機持ちのランクを作るとしたら、

一夏が見事に最下位である。

「ですが、一夏さんも実力をつけてきていますわよ？」

「お世辞はいいよ、セシリア」

「お世辞なんかではありませんわ！徐々に一夏さんも強くなつていきますわよ」

「だったらいいんだけどな」

一夏の部屋へ

一夏はベッドで横になっていた。

「でも、実際鈴の言うとおりで何だよな」最近はずに負け続けてるし、授業でも叱られることが多くなつたし、それにクラスの子と模擬戦したけど、

結構危なかつた場面もあつたからな」

この前の放課後のことである。

いつもの如く楯無の特訓を受けに行つたら、突然、楯無がこういったのである。

「一夏君、一度クラスの子と模擬戦してみようか？」

「へ？模擬戦ですか？」

「そう、模擬戦」

という事でクラスの子を呼んで模擬戦をしてみると、かなり危ない場面もちらほら見られたが何とか勝てた。

「はあ、はあ」

「ちよつと、一夏君。さっきのは危ない所が何個か見られたわよ？」

「はい」

「最近、いろんな事があつたから特訓してないけど自主連してる？」

「・・・・・・・・」

「その様子だとしていないみたいね」

実際、一夏は最近、放課後に自主連をせず、その日の勉強で手一杯だったりする。

「勉強も大事だけど実技も出来ないダメよ？」



「はい」

「楯無さんはああいうけど、あれを俺にやらせるってのがおかしいだろ。」

そもそも、俺は事前勉強を一切してないんだから。あの人と一緒にして欲しくねえよ」

一夏は最近の自分に焦りを感じていた。

実力が伸びない事などで精神的に疲労もたまってきているのである

「まあ、言い訳にしかすぎねえか。寝よ。明日も早いんだし」

そう言い、一夏は眠りについた。

## 第一話 日常（後書き）

どうも、二度目の更新です。

如何でしたか？

感想も待っています。

では、さよなら

## 第二話 いらつき

今、一夏はとある少女を校門で待っていた。

この前の模擬戦で負けた為に買い物に付き合おうという約束をしたからである。

「遅いなあ、箒の奴」

「ま、待たせたな」

「ああ、来たか。行こうぜ？」

「う、うむ」

箒が来た事により二人は買い物へと向かった。

その二人を追う影に気付かずに。

「見た？」

「ええ、見ましたわ」

「追跡あるのみだね」

「そ・うだね」

「あれ？珍しく簪もいるじゃないの」

「うん、さつき一夏が見えたから」

「じゃあ、行きますか」

「」「」「了解」「」「」

いつもの専用機メンバーだった。

「遅いぞ、一夏！」

「無茶、言つなよ。こっちは寝不足なんだぜ？」

「何故だ？」

「昨日、テストの勉強してたんだよ。今度あるだろ？」

「そんな物は毎日、予習復習していればいけるだろ？」

「そんなものってお前なあ、毎日IS動かしてんのにそんな時間あるのかよ？」

「ああ、時間配分さえ考えれば出来るぞ？」

「よくできるなそんな事」

「これぐらいは誰だって出来るぞ？一夏だってしているであろうっ？」

「・・・お前らと一緒にすんなよ」

「ん？何かいったか？」

「いや別に。行こうぜ？」

「うむ！」

「むう、何二人で良い雰囲気になってんのよ」

「抜け駆けは無しって箒が言ってたのに」

「これは後で一夏を鍛える直す必要があるようだな」

「ふふ、一夏さん楽しみにしているといいですわ」

この瞬間、一夏が筋肉痛で苦しむことが決定したようだ。

「ふゝ最近はどう、服も秋物が多くなってきたな」

「ああ、そうだな」

二人は服屋から出てきたところであった。

「一夏、すまないが少し待っていてくれるか？トイレに行ってくる」

「へいへい、どうぞ」

「すまないな」

箒は一夏に荷物を預けトイレへと走っていった。

「はゝ本当に俺は強くなってるのか？」

一夏は最近の自分について考えた。

「最近も箒にも負けるし、代表候補生のみんなにはまだ一回も勝て

てないし、

楯無さんには怒られるわ、千冬ねえには怒られるわ。

本当に皆を守る力なんて俺が手に入れられるのか？」

「隣良いかしら？」

「え？はい、どうぞ」

隣に女性が座った。

「久しぶりね。織斑君？」

「えっと、失礼ですけどどこかであいましたっけ？」

「あら、もう忘れたの？ほら、前にテレシアで会わなかったかしら？」

「ああ！あの時の服の人！」

「ふふふ、そうよ」

「確かスコールさんでしたっけ？」

「正解。よく覚えてたわね」

「ええ、まあ」

「所でさっき何だか表情が優れなかったけど何か悩みでもあるの？」

「え？顔に出てましたか？」

「あら、やっぱり悩みがあったのね？」

「あ」

「ふふふ、面白い子ね」

「はははは……」

「一夏……」

「ん？彼女さんかしら？」

「か、彼女！」

篤は思わず顔を赤くしてしまった。

「違いますよ、ただの友達ですよ」

「む！」

「痛い！何すんだよ、篤！」

「ふん、自分の胸に手を当てるなんて考えてみる！」

「あらあら、不機嫌さんね。また会えたら今度はお茶でもしましょ

う？」

「あ、はい」

そのまま、スコールは人ごみの中に消えていった。

「一夏、今の人は誰なんだ？」

「知り合いだよ」

「お前の周りには美人さんがよく集まるんだな」

「は？何の事だよ？」

「ふん！それよりも行くぞ、一夏」

「今日は付き合ってくれてありがとう」

「ああ、いいよ。それよりも早く帰ろうぜ？眠い」

「そればかりだな、貴様は」

「お前が朝早くに起こしたせいだろうが！しかも理由も聞かせずにいきなり、

足踏みやがって何さまだよ」

いらつきながらも帰っていった。

## 第二話 いらつき（後書き）

こんばんわ〜ケンです。

如何でしたか？

書き忘れてましたがこの話は原作7巻後の話です。

一夏は原作であんなにもふりまわされてんのにいらいらとか、  
しないのか？という事で考えてみました。

感想も待っています。

では、さよなら

### 第三話 かすかな異変（前書き）

どうも、ケンです。

この作品での簪と他のメンバーとの友好関係は、  
名前で呼び合っくらい仲が良いです。  
では、お楽しみください。



### 第三話 かすかな異変

現時刻、6:30

一夏の部屋へ

今、一夏は昨日の疲れからかいつもなら起きる時間を寝ていた。

昨日も、帰ってからISの理論について分からないところを調べてたら、

夜も遅い時間帯に終わった。

本来なら眠い体に鞭をうち、起きなければならぬのだが  
幸い今日は日曜日、ゆっくり眠れるというわけである。

来客さえ来なければ……

「一夏！朝稽古だぞ！」

静かな部屋にドアを強く開けた音と凜々しい声が響いた。

「ん？まだ寝ているのか？おい、起きろ一夏！」

こうして一夏の1日は幼馴染との朝稽古から始まる。

「ZZZZZZZZZZ」

「起きないな、起きろ一夏！朝稽古の時間だぞ！」

「ん〜うるさいな〜日曜くらいゆっくり寝かせろよ〜」

そう言いはぎとられた布団を再びかぶり眠りに着こうとするが、  
幼馴染がそれをさせなかった。

「起きろ、一夏！不摂生はいかんぞ！」

毎日の継続が、血となり骨となるのだ！」

「お前は何時代の人間だよ」

「良いから、起きろ！」

「あーもう分かったよ！起きればいいんだろ！起きれば！」

「あ、ああ」

「で？今日も剣道場か？」

「いや、今日は皆もやるという事で朝から模擬戦をする事になって

るんだ」

「こんな早くからアリーナの予約取れたか？」

アリーナを使用するには予約を取らなければいけないのである。

「いや、使用時間は10時からだ」

「はあ？まだ時間あるのに俺を起こしたのか？」

「いや、折角だから剣道でもどうかと」

「良いよ、俺はパス。まだ寝むい」

「い、いや一夏、もう時間何だが？」

「それが？眠いから寝て何が悪い？今日は休日だぜ？」

「い、いやすまない」

「じゃ、御休み」

一夏は再び眠りについた。

ふ気のせいだろうか？最近一夏がだらしなくなっているような気がする

疑問を持ちつつも箒は剣道場へと向かった。

三時間後、第3アリーナ

「遅いね一夏」

「一体嫁は何をしているんだ？」

「さあ、寝てるんじゃないの？」

「一夏に限ってそれは無いとは思う」

上から、シャル・ラウラ・簪である。

「あ、来ましたわ！」

セシリアに指をさす方向を見ると一夏が眠たそうな顔で、こちらに来ているのが見えた。

「遅いぞ！一夏、何をしていた！」

「寝てた」

「は？もう9時よ？まだ寝てたの？」

「まあな」

「昨日、何時ぐらいに寝たの？」

「確か・・・3時はまわってたような気がする」

「3時って夜中の三時だよね？」

「ああ」

「そんな不摂生をしていては体が持ちませんわよ？」

「そうだな」

「それに今の一夏の髪の毛すごい」

「一夏の髪の毛はいつもはきれいに寝癖も整えられているが、今はかなり、曲がったりはねてたりした。」

「そうだな。昨日はシャワー浴びてそのまんまで寝たからな」

「でも、髪ぐらいいは整えようよ。人は外見で判断するよ？」

「・・・俺の勝手だろうが」

「何か言った？一夏」

「いや、何も」

「そう、じゃあ始めようか？」

「だな」

「ですわね」

「うん」

「そうね」

「分かった」

「いちいち指図してんじゃねえよ。お前らは俺の何なんだよ。俺の勝手だろうが」

「それに時間をよく見ろ！まだ9：30だぞ。それで遅いつて、」

「お前達が早くに来て待っていただけだろうが」

「一夏は心の中でいらつきながらも模擬戦のため、準備運動を始めた。」

### 第三話　かすかな異変（後書き）

如何でしたか？

テスト二日目が終わりました。

残り6教科ぐらいあったと思います。

改変物語の細かな修正も着々と進んでおります。

話が矛盾したりつながらない場合はそこまで

修正が完了しているという事ですのでご承知ください。

では、またお会いしましょう。

## 第四話 VS 鈴

「誰から行く？」

「ここはくじで決めないか？」

「でも、前の抜け駆けが・・・」

「それもそうだが、まだ一夏はそこまで実力がある訳ではない。怪我でもされたら困る」

「まあ、それもそうね」

「ですわね」

本人達は聞こえていないと思っているだろうが一夏には聞こえていた。

「へそくだよな。まだ俺はあいつらに勝てるほど強くない。」

「分かってたつもりだけど直接あいつらから聞くと辛いな」

「行くわよ〜じゃんけん！ポン！」

「やった〜あたしが1番よ〜」

「うう、あの時チヨキサえ出していなければ」

「3番目・・・」

「私は4番目か」

「僕は2番目」

「私が5番目か」

順番はこうである。

1、鈴

2、シャル

3、簪

4、篝

5、ラウラ

6、セシリア

「じゃあ、始めるわよ！一夏」

「待て、まだ準備が・・・」

「問答無用よ！」

そう言い鈴は早々と展開した。

「へいへい」

一夏も嫌々ながら展開した。

「始めるわよ」

「ああ」

二人の戦いが始まった。

「先手必勝よ！」

甲龍の肩がスライドし龍砲が放たれた。

「くそ！」

一夏も雪片二型で応戦しようとするが砲身も砲弾も見えないうえいつ、どのタイミングで来るのかが把握しづらいため、

モロに喰らってしまった。

「ぐ！」

「逃がすもんですか！」

一夏は鈴から距離を取ろうとするが鈴がそうさせなかった。

「はあああ！！！」

二刀流の双天牙月で一夏を切っていた。

「くそが！武器くらい出させる！」

「そんな事、試合で言えるわけないでしょうが！」

「ちっ！」

一夏は丸腰の状態で剣劇を避けていた。

「まだまだー」

「させるか！カノンモード！」

「そんな物喰らわないわよ！」

「な！」

一夏は至近距離で撃つたにもかかわらず避けられた事に驚いた。

「一夏の奴、まだ気づいていないのか？」

「どうかしたのか？」

「ああ、さつき一夏は至近距離からの雪羅の砲撃を、

避けられた事に驚いていただろう」

「ああ、それがどうかしたのか？」

「実は一夏はね癖があるんだよ」

「癖？」

「そう、一夏は雪羅のカノンを名前を叫んで使ってるでしょ？

それで、撃ってくるって分かるんだ」

「確かに。だがクローモードは何も言わずに使っているぞ？」

「一夏の得意武器は近距離のものばかり」

簪が静かに語り始めた。

「クローモードは近距離武器だから名前を言わずに使える。

だけど、シールドモード、カノンモードの二つ、

カノンはともかく、シールドは恐らく一夏の中では遠距離武器だと、

無意識のうちに判断しちゃってるの」

「そう言う事。ISの戦いは一瞬の判断が勝敗を分ける時だってある。

だから一夏みたいに名前をいっちゃうとどんなものか、

予想は着くから一瞬で対策が打てる」

「だ、だが敢えて言うておいて別の武器を出すことも可能なのではないのか？」

「確かにその様な事も可能ですわ。ですがそれには最低でも一つの操作で、

複数の操作を、つまり並列思考が出来なければ無理ですわ。

人間は音で判断する事もありませんから」

「セシリアの言うとおり今の一夏では並列思考は出来ない。

だから、バカ正直に言った武装しか出せない。  
それにあいつはただでさえエネルギー消費の多い武装しか、  
持っていないにも関わらずバカスカそれを使用する。  
その為にエネルギーがすぐに尽きて負ける」

「ぐっ！」

白式のエネルギーは既に尽きかけており雪羅はおろか、  
零落白夜、イグニッションブースト瞬時加速すら使えない。

苦労して出した雪片式型もただの物理武器となっていました。

「さあ、これでフィニッシュよ！」

鈴が双天牙月を二つに分解し、同時に投げた。

一夏はそれを避けようとするが一方に意識が集中しすぎてしまい、  
もう一方の攻撃を喰らい残りも喰らってしまった。

「隙あり！」

「しまっ！」

そのまま、一夏は龍砲を喰らいエネルギーが尽きた。

「ふっ勝った。あんたもまだまだねえ」

「・・・」

「じゃあ、今日のご飯は奢ってね？」

「はあ？何言ってるんだ？そんなこと聞いてねえぞ！」

「え？そうだったけ？ごめんごめん。実はね負けた人は、

勝った人に奢らなきゃいけないっていうルールなの」

「ふざけんな！聞いてない事を出来るか！」

「でも、負けたじゃないの、あんた」

「ぐっ！」

「じゃあ、よろしくね。あんたが勝てば良いのよ」

鈴は嬉しそうにスキップしながら観客席へと戻っていった。

「ふざけてんじゃねえぞ！何で賭けありの特訓に参加しなきゃいけないんだ！」



俺が負けるのは決定だろうが！わざとしてんのかよ！  
一夏はいらつきながらもエネルギーを補給しに行った。

まだ、誰も気づいていない少年の中の黒い感情。

それは少年すら気づいていない物。

それに気づいたとき少年は生まれ変わり、  
少女達は後悔する。

『ああ、何で気付かなかったんだらう』

#### 第四話 VS 鈴（後書き）

こんばんわ

定期考査で忙しいケンでございます。

活動報告に書きましたが20日までは改変の方は、更新致しません。別作品はこの期間に更新を、

改変の方は、細部の修正を行います。

よろしく願います。

## 第五話 VS シャル、そして女子の話（前書き）

おはようございます。

今日は学校も休業日で休みですので二つ、更新したいと思います。

注意：ここでのエネルギー補給というのは手早く終わらせられる作業ととらえて下さい。

## 第五話 VSシャル、そして女子の話

休憩も終わり次はシャルとの対戦だった。

「よろしくね一夏」

「ふあああゝああ、よろしく」

「もう、みっともないよ？一夏」

「あ、ああ悪い」

「お前らがこんな朝早くから特訓何か誘うからだが！今日はせっかくの日曜なのに俺を過労死させる気か！」  
いらつきながらも模擬戦が始まった。

「行くよ、一夏！」

シャルはマシンガンを両手にコールし、乱射し始めた。

「くそ！」

白式の雪羅はエネルギー兵器には敵なしだが、生憎、実弾兵器には全く耐性が無いため防ぐ手立てがない。

それにより避けるしかないのだがいかんせん、

一夏はまだ、技術が未熟なため一発ならまだしも、

この様に何発も撃たれると全く避けれずに当たってしまうのである。

「まだまだだよ」

「くそが！」

一夏は雪片式型をコールするがシャルは中距離武器をコールし、それを防ぎまた距離を取りマシンガンを連射。

この繰り返し。

「くそ！一気に薙ぎ払う！カノン！」

「当たらないよ！」

しかし、シャルは一夏の癖を熟知しているため、事前にパイルパンカーをコール、避けると同時に一夏に接近しパイルパンカーを一発撃ちこむ。

「くそ！」

一夏も雪片を当てようと振るうが、すぐさま離脱し当たらない、距離まで下がりスナイパーライフルを放った。

「くー！」

思わず下がろうとするがシャルはそれを許さず、再び近づき近距離からのスナイパーライフルを、弾切れを起こすまで、撃ち切った。

「間合いは外させないよ？このまま、終わらせる」

「この距離なら外さねえ！カノン！」

雪羅のカノンがシャルを直撃した。

「よし！」

しかし、爆煙が晴れるとそこにシャルはいなかった。

「な、どこ行った！」

「一夏？一瞬でも意識が外れるのは駄目だよ？」

「しまっ！」

そのまま、シャルのパイルパンカーを喰らい白式のエネルギーは尽きた。

「ふうお疲れ様。一夏」

「ああ」

「じゃあ、今日のお昼よろしくね？」

シャルは嬉しそうに顔を緩めながら観客席へと戻っていった。

「今日は日曜だから出かけようと思ったのに！あいつらの所為で、全部の予定がおじゃんじゃねえか！」

そう思いつつ一夏は休憩込みでエネルギーを補給しに行った。

「あゝあ、めんどくさい。何でも連続でしなきゃなんねえんだ  
よー！」

「……………でござい」

「そうそう!」

「ん? 誰か話してるのか? 日曜なのに残ってるって珍しいな」  
「そう思いつつも通り過ぎようとした時……」

「でもさあ、織斑君てうざくない?」

自分の名前が聞こえ足を止めた。

「あ! それ分かる」

「そうそう、あの少し熱血っていう所がむさ苦しいというか」

「そうそう! でね、この前の考査あったでしょ?」

「うん、あつたけどどうかしたの?」

「前の考査はあだし、家の事情で全く勉強出来なかったって言った  
でしょ?」

「ああ、確かに」

「で、今回は最下位かなって思ったら私よりも下の人がいたのよ!」

「え、もしかして」

「織斑君?」

「そうなの! 織斑君てさ放課後も残って勉強してたでしょ?」

「それで、何も勉強してない人に負けたの?」

「そうなの。それでねこの前聞いてみたの。どんな勉強方法してる  
のって」

「ふんふん」

「そしたら、自分で問題作ってそれを必死にしてたんだって!」

「えゝそんなのテストで出るはずないじゃん!」

「しかもさ、織斑君よく参考書とかしてるのに最下位って時間の無  
駄」

「ははははは! 確かに不効率でさらに能率も悪い勉強方法とか初め  
て聞いたよ!」

「……ははははははははは! ……」

そのまま女子たちは満足したのかどこかに行ってしまった。

「何で? この前聞いたときは良い勉強方法だね! って言ったのに嘘  
だったのかよ」

一夏はそのまま、床にしゃがみこんでしまった。  
「くそ！何で俺がこんな目に遭わなきゃいけないんだよ！」  
そう思いつつもアリーナへと戻っていった。

徐々に積もる黒い感情。

これがこの先どうなるのかは、  
これからの楽しみ。

## 第五話 VS シャル、そして女子の話（後書き）

話の中で女子の話のシーンがありました、

そこは整備室を出て、アリーナに行く途中のシーンとしてとらえて下さい。

それではさよなら



## 第六話 VS 簪 そして僅かな察知

一夏は重い表情でアリーナに戻ってきた。  
しかし、その事に誰も気づいてはいなかった。

一人を除いて……

「どうしたんだろう？一夏、さっきよりも元気がないというか……」

簪だけがメンバーの中で唯一若干気が付いていた。

「もう、始めても良いかな？一夏……」

「ああ、始めようか」

そう言い簪は打鉄式式を展開するが一夏はまだだった。

「一夏？」

「いや、なんでもない。白式！」

いつもなら一夏の呼びかけに瞬時に反応する白式だが、この展開では若干遅く感じた。

「気のせいかな？今、白式の展開が遅かったようない？」

疑問を感じつつも模擬戦を始めた。

「どうだった。シャルロット？」

「うん、やっぱりラウラの言う通りだね」

「何がですか？」

「ああ、一夏はね効率よく戦闘を運ぼうとしていないんだよ」

「効率よく？どういう意味だ？」

「先程の戦いのパターンで言うと一夏は戦いの序盤は有利に運んでいるが、

最後は決まってエネルギー切れを起こし負けてしまう」

「つまり、一夏はエネルギーを考えずに最初からエネルギーを、

消費しすぎて、負けているというのか？」

「ああ、まだあいつがそれに気づいているならばまだ修正の余地はある。

だが、あいつはその事に全く気が付いていない」

「ならば教えれば……」

「だめよ」

「え？」

「そうしたらあいつは私たちからの情報でしか自分の間違いを見つ  
けられなくなる」

「そう、自分で気付かない限りこれ以上強くはならない」

「そ、そうか」

「くそ、やっぱり簪とは完全に相性最悪だ」

「一夏は弾丸の嵐に完全に囚われていた。

距離を取ろうにも簪は近距離も遠距離も扱ったため、

間合いは関係なかった。

「もうすぐ。もうすぐで山嵐の準備が終わる」

簪は得意の並列思考により闘いながら大気の状態、

システムの状態を確認していた。

「もうエネルギーも雪羅、零落白夜も一発分しか残っていない。

どっちを使うべきなんだ！」

「一夏は弾丸を避けながら考えていたが、

すぐ後ろに壁が迫っている事に、気づいていなかった。

「もう少し、もう少しで一夏は壁に当たる」

彼女の読み通り一夏は壁に背中からぶつかり動きを止めた。

「しまっ！」

「終わる。山嵐！」

そのまま何発ものミサイルが放たれ、そのほとんどが一夏にあたり

爆発を起こした。

「ぐう！」

「だ、大丈夫？一夏」

「ああ、まあな」

簪が心配げに覗いた。

「よく見ると簪って可愛いよな」

簪の顔を見ていて思わずほんのりと顔を赤くしてしまった。

「一夏？」

「いや何でもない」

「全く情けないぞ一夏！」

皆がこちらに来ていた。

「そうよ！何で後ろに壁がある事ぐらい気付かなかったのよ」

「そうだぞ、一夏。男である貴様が女である私たちに負けてどうする！」

「……うるせえな」

「なんか言った？一夏」

「いや、何でもねえ」

そう言い一夏は次の模擬戦に備えるために整備室へいった。

「ふ〜ん、変な一夏。ねえ、簪」

「……」

「簪？」

「い、いや何でもない」

「そう」

「さっき、一夏『うるせえ』って言ったような……」

いつもとは違う怒った感じで……」

「くそが！何なんだ、あいつらは！こっちは何もしていない状態でここまで」

来れたんだぞ！あいつらは何年経験を積んでると思ってんだ！  
ー夏はいらつきながらも整備室に向かった。

第六話 VS 簪 そして僅かな察知（後書き）

どうも、二回目の更新です。

実は最初の戦う順番で二番目と三番目を間違っ  
覚えてしまい先程修正いたしました。

それよりも如何でしたか？

徐々に溜まっていく黒い感情。

こつ言うストレスは定期的に出さないと  
いけませんね。  
では、さよなら

## 第七話 VSラウラ そして怒る一夏

「遅いぞ！一夏、何をぐずぐずしているのだ！」

「ああ、悪い」

「トイレだから仕方ねえだろうが！第一、男子便はここから遠いんだぞ！」

IS学園はほとんどが女子のため、トイレもほとんどが女子便。そのため数少ない男子便まで毎日、走っているのだ。

「まあ良い、では始めるとするか」

「そう言いラウラは展開した。」

「へいへい」

「一夏も展開しようとするが・・・」

「ん？」

「どうかしたのか？」

「い、いや何でもねえ」

「ほまただ、白式の展開速度がさっきよりも遅くなってる気がする」

「始めるぞ！」

「ああ」

模擬戦が始まった。

「ねえ、箒」

「何だ？箒」

「さっきの一夏の展開、遅くなかった？」

「そうか？いつも通りだと思っが」

「そう」

若干、感づき始めている箒だった。

「どうした、一夏！避けているばかりでは勝てんぞ！」  
「分かってるよ！」

ふとは言ってもラウラは1対1では反則的に強い。AICに捕まったら終わりだ」

一夏はラウラのAICに警戒しすぎている為先程から、一度も攻撃はしていない。

ラウラは積極的に攻撃をしてきた。

「そろそろ行くか？雪片！」

「どうした、一夏！丸腰の状態で勝てるでも思ってるのか！」

「な訳あるか！」

そう強気になるが異変が生じていた。

「何でだ！何で、雪片式型が出ない！異常もないのに何で！」

実は一夏は武装が出せないでいた。

「くそ！雪羅だけで戦うしかねえのか！」

「カノン！」

「当たるかそんな物！」

ラウラは放たれた雪羅のカノンを避け、一気に一夏に近づいた。

「はああ！」

「くそ！」

ラウラがエネルギー手刀で切りにかかるがそれをクローモードで弾いた。

「一夏、雪片式型はどうした！」

「気にするな！」

そのまま、戦いは継続された。

「珍しいな。一夏が雪片式型を使わないなんて」

「それも、そうですね」

「エネルギー消費の多い雪羅を使うって何してるのあいつは？」

「さあ？」

「簪はどう思うっ？」

「……………」

「簪？」

「え？あ、うん。さあ？」

「ふくん。変な簪」

「さつき、一夏つろたえていたような気がしたけど、

気のせいかな？それに普段なら雪羅のクローモード何て、めったに使わないのに」

「そろそろ終わりにするぞ！」

「終わってたまるか！」

一夏はラウラから距離を取り機会を窺っていた。

「チャンスは一回、それさえ当てれば勝てる」

「終わりだ！」

「終わるのはお前だ！」

一夏は最大の瞬間加速イグニッションブーストでラウラに近づき、クローモードを当てようとする。

「しまっ！」

「よし！」

当たると思った瞬間……

「な！エネルギー切れ？」

「隙ありだ！」

当たる瞬間にエネルギーが切れクローは消えてしまい、AICに捕まってしまった。

「どうする一夏？」

「……………負けだよ俺の」

一夏の奢る人物が増えた。

「情けないぞ！もう少しエネルギーにも気を配らなければいかんぞ！」



私の嫁であろうが！」

「嫁、嫁っていつからお前は俺の嫁になったんだ？そっちがこっちの、

意見も聞かずに勝手に言ってるだけだろうが！

こっちの気にもなれ！」

「聞いているのか！一夏！」

「ああ！聞いているだろう！分からねえのか！」

「！！！！！！！！」

ラウラは固まってしまった。

「ちっ！」

「お、おいどこに行く！」

「整備室だよ！」

そのまま、行ってしまった。

「何故嫁はキレたのだ？」

「さあ？」

「あらかた負け続きでイラついているだけだろう。気にする事はない」

「そうですね」

「だね。気にすることは無いよ、ラウラ」

「そうだな」

恋は盲目と言うが間違った方向に行くと、  
最悪の事態も起こることもある。

まだ、この少女達は気づいてはいなかった。

第七話 VSラウラ そして怒る一夏（後書き）

こんにちは〜ケンです。

如何でしたか？

では、また今度〜

## 第八話 VS 幕 そして浮き彫りになる異変

一夏は整備室でエネルギーを補給していた。

「くそが！何さまのつもりだ！あいつらは！」

今までの事にキレていた。

「何が男が女に負けて情けないだ！代表候補生と一般生徒の実力の差が、

分からねえのか？それともただ単に俺を使って誇示しているだけなのか？

「算もそうだ。あいつが勝てるのはあのチートみたいなワンオフアビリティで単一使用能力のお陰だろうが！」

それをあたかも自分の実力みたいに言いやがって！」

補給も終わりアリーナに向かっていると千冬に出くわした。

「ちふ、じゃなくて織斑先生」

「ん？一夏か、今は職務外だ。いつも通りで構わん」

「そう」

「ああ、そうだ。一夏」

「ん、何？千冬姉」

「最近お前、あいつらに負けているそうじゃないか」

「……」

「そんなのでお前の言っている事が出来ると思うか？」

「……」

「それに最近、授業でも失敗ばかりだな。何かあったのか？」

「別に」

「そうか。なら良い。これからも励めよ？期待してるんだからな」

そう言い千冬は一夏にしか見せない笑顔で通って行った。

いつもなら嬉しくなるのだが今ではただのプレッシャーの塊である。

「期待何かすんなよ。俺はあんたとは違うんだ」

「来たか。遅いぞ、一夏！何をぼやぼやしているのだ！」

「……黙れよ」

「何か言ったか？」

「別に、始めようか」

「うむ、そうだな」

「何が遅いだ！こっちはわざわざ遠い所まで行って戻ってきてんだぞ！」

「だったらお前のそのチートな絢爛舞踏で補給してくれよ！」

「一方、箒の心情は……」

「ひゃった！ようやく、一夏と闘える！一夏に私の実力を見せる時だ！  
そうすれば、一夏も私に頼ってくれる！うん、うん」

「恋する乙女な心情だった。」

「行くぞ！」

「……ああ」

「箒は紅椿を展開し、一夏も今回は問題もなく白式を展開と同時に、  
雪片式型を展開した。」

「どうかしたのか？」

「い、いや何でもない」

「なら行くぞ！」

「ああ」

「今、念じていないのにこいつが出てきた。まるで遅れて出てくるように」

「気のせいかな？まあいい、出たのなら何でも構わん」

「ねえ、一夏と箒どっちが強いと思う？」

「そうだな。どちらかと言うと箒の方が上だな」

「まあね。絢爛舞踏を抜いたとしても箒の方が強いと思う」  
「あたしも箒ね。セシリアは？」

「わたくしも箒さんでしょうか？箒さんは才能がおありのようですね。」

「箒さんはどう思います？」

「私は……一夏かな」

「え、何で？」

「何でかは分からないけどそう思う」

「だが、今の状況もそうだが箒が既に一夏を圧倒しているが？」

「だとしても、私は一夏だと思う」

「ふん」

「はあああ！」

箒は二本の刀で一夏を攻撃していくが、一夏は避けてはいるがワントンポ遅い反応だった。

「どうなってるんだ！白式の反応がいつもより鈍い！」

「どうした、一夏！動きが遅いぞ！」

「分かってるよ！」

「一夏が雪片式型で攻撃しようとした瞬間……」

「な！」

突然、雪片式型が消えた。

「何をしている一夏！何故、武器を直す！」

「知るか！勝手に戻ったんだ！」

するとオーブンチャンネルを通じて皆の声が聞こえてきた。

『どうした一夏！』

「勝手に武装が戻ったんだ」

『一応、整備室で確認してみようか？』

「ああ、分かった」

始まる異変。

そして、少年の運命はここから分かれていく。

第八話 VS 尊 そして浮き彫りになる異変（後書き）

こんばんわ、ケンです

如何でしたか？

それでは、御休みなさい

## 第九話 黒い感情の具現化、そして始まる異変

誰も知らない会話

「な、何なの！あなたは！」

「私は彼の黒い感情が具現化したもの」

「彼の黒い感情？」

「そうよ」

「こんな所に何の用？」

「別に今は何かをする訳ではないわ。」

ただ貴方達は彼を全く理解していない」

「どういう意味ですか？」

「私達は貴方よりは理解していると思うけど？」

「ふふふ、まあ良いわ。私はまだ主人公ではない。傍観者よ」

「????」

「ねえ、知ってる？人間にはパターンがあるのよ？」

「パターン？」

「そう、どれだけ努力しても意味のない人間、

努力を知らない人間、努力を諦める人間

そして、努力をして成長する人間。彼はどれだと思う？」

「勿論、努力をして成長する人間だよ」

「私も同感です」

「ふふふ、違うんだな」

「「え？」」

「彼はね憎しみで強くなる」

「で？どう思う？薰子ちゃん、虚ちゃん」

「うーん、別に異常と言う異常は見当たらないわ」



「そうですね。このデータを見る限りは特に異常は見当たりません」  
今、白式は整備室で整備課のトップ達に見てもらっていた。

「でも、確かに勝手に雪片式型が消えたんです！」

「とは言われてもね〜」

「武装が搭乗者の意思に反してクローズされるってのは無いんだけどな〜」

本当に勝手にクローズしたの？」

「ほ、本当ですよ！」

「ひとまず、簪ちゃんと本音ちゃんは残って頂戴。

後はみんな帰っていいわよ」

「お、俺も手伝いますよ！」

「良いわよ、別に。一夏君は何もわからないでしょ？」

「!!!!!!!」

「あ、後、代表候補生の皆にも残ってもらおうかしらね」

「良いぞ別に」

「分かりましたわ」

「はい」

「分かったわ」

「それと、篝ちゃんとお姉さんと連絡できるかしら？」

「ええまあ」

「じゃあ、連絡お願いするわ。私達だけでは分からないからね」

「分かりました」

「じゃあ、一夏君は帰っていいわよ。お疲れ様。ゆっくりしてね」

「……はい」

「ちゃっぱり俺は皆にはいない存在なのか？いや、そんな筈はない！  
この世にいない人間はいない！それにただ、俺に知識がないだけ  
であって、

あいつらは代表候補生で俺なんかよりもISの事を知っているから、

残されたんだ。そうだ、きっとそうだ。

でも、本当にそうなのか？」

一夏は若干人間不信に陥っていた。

「は、何で俺がIS何かを動かすんだよ。俺なんかよりも、頭のいい奴が動かせばよかったのに。」

ま、もっと勉強すれば良い話か。

あんなのただの被害妄想だな。よし、勉強するか！！」

己を奮い立たせ一夏は部屋へと向かっていった。

「お姉ちゃん」

「ん、何かしら？ 簪ちゃん」

「あの言い方は無いと思うけど」

「そうかしら？ 一夏君に任せる事がないからああ言ったまでだけど」

「そう」

簪はそのまま画面を流れる膨大な量のデータに視線を戻した。

「ほら見なさい！ 一夏はどんな事があってもくじけないんだよ」

「そうです」

「ふふふ、今はただそういう風に見えるだけ。

もうじき彼も気づき始めるわ。

彼女たちに抱いているこの黒い感情にね」

第九話 黒い感情の具現化、そして始まる異変（後書き）

こんにちは、ケンです。

如何でしたか？

少し楯無の発言がきついいとは思いますがご承知ください。

ちなみにこの話で言うところの作者は、

下から見たら最高、上から見たら最弱です

では、さよなら

## 第十話 その胸に抱く感情

「検査も無事に終わり、白式も異常はないとのことで帰って来た。今日は検査の返却日だった。」

「では、テストを返す。名前の順で来い」  
「よろこぶ者、落ち込む者など様々だった。」

「あれだけ勉強したんだ。結構いい線は行った筈」  
「織斑」

「はい」

「もっと精進しろよ？」

「は？」

「答案用紙に書いてあったのは全て40という数字だった。」

「な！」

「この学年で平均が40台なのはお前だけだぞ」  
「つまりは最下位と言う事になる。」

「休み時間になるといつもの皆がやってきた。」

「どうした、情けないぞ！一夏！」

「そうだぞ！私の嫁だろうが！」

「にしてもひどい点数ねえ。どんな勉強したのよ」

「皆はどうだったんだよ」

「全員が40という点数は無く、どれも80以上。最低でも70はある。」

「簡単だったでしょう。今回の問題くらい」

「そうだね。前に比べると易しかったかな」

「お前らと一緒にすんなよ。俺はお前らとは違う！」

「ねえ、一夏。この後皆で模擬戦でもどうかな？」

「結構だ」

「え？」

「どうせ負けるのにする意味ないだろ？」

「で、でも一夏だつていい線行つてるよ？」

「そ、そうですね」

「思つてもない事を言うなよ。見苦しいぞ。」

とにかくこれから俺は模擬戦はしない」

そのまま一夏は帰つてしまった。

「何かあつたんでしょうか？」

「さあ」

「くそ！」

一夏は部屋に着くなり答案用紙を投げ捨てた。

「何で！何で、あんなにしたのにこんな点数何だ！」

勉強方法だつて変えた。何冊も参考書を解いたのに何で！」

それから一夏はベッドで横になっていた。

「努力は人を裏切らないって言うけどそんな訳ないか。」

才能はある奴は裏切らないってことかよ」

「あゝもう！気分転換に散歩に行こう。」

あいつらに見つからないように。

見つかったらまた付いてこられる」

一夏は着替え外出の許可をもらいそこら辺を散歩し、

公園のベンチに座っていた。

「ひゃっぱり俺は才能がないのか？そういえば昔から努力しても、何もしてない奴に負けてばっかだったけ？」

剣道だつてそうだった。毎日、遅くまで竹刀を振った。

お陰で筋肉痛になつてまともに動けない日もあつたな。

それで、第と試合すると一本負け。

「そういえば、努力が足らんぞ！つて言われたっけ？」

「ははっ！俺は何をしても無駄だな。」

時間が無駄って言われても仕方ねえか」

「一夏は今までの事を思い出し自虐の思いで笑っていた。」

「隣良いかしら？」

「ええ、どうぞ」

「そう言えばこんな事、前にもあったような？」

「そう思いとなりをふと見ると・・・」

「スコールさん！」

「ふふふ、久しぶりね？織斑君」

「久しぶりつつてもこの前に会いましたよね？」

「それもそうね」

それから少し一夏はスコールと話していた。

「ねえ、悩みでもあるのかしら？」

「え？」

「いや、さつき難しい顔をしてたから」

「別にそんなに深い悩みじゃありませんよ」

「まあ、そう言わずにお姉さんに言ってみなさい」

「・・・実は最近焦ってるんです」

「焦ってる？何に？」

「自分の成長にです」

「そう言えばISを動かせたっけ」

「ええ、それで俺は皆を護りたいのにどれだけ特訓しても強くなつた気が、

しないんです。代表候補生の皆には勝ったことないし、専用機持ち

じゃない人とかに、

負けかけたりとか」

「そう。それで貴方はどう思ってるの？」

「え？」

「彼女たちにどんな感情を抱いているの？」

「俺は・・・」

「ふふふ、まあゆっくり考えなさい。」

もし、気付いたらここに電話して頂戴」  
渡された紙には電話番号が書いてあった。

「これは？」

「気付いてからのお楽しみよ。もし気づかないんだったら、  
そのまま焼却して頂戴。良いわね？」

「はい」

「ふふ、良い子は好きよ。じゃあね、織斑君」

そう言い残しスコールは人ごみに消えていった。

「俺があいつらに抱いている感情……」

渡されたメモ用紙をポケットに入れ、一夏は再び歩き出した。

「あ、もしもし？私よ」

『どうかしたのか？』

「ふふふ、良い人材が見つかったわ」

『人材？こつちにか？』

「そうよ。まだ気づいていないけど気付いたら、  
きつと彼はこつちに来るわよ。力を求めて」

『悪いが言ってる事がよく理解できないんだが』

「まあ、それもそうね。まあ楽しみに待ちましょ。」

もうそつちに帰るから迎えをよこして頂戴。オータム」  
『分かった』

そう言いオータムと呼ばれた女性は電話を切った。

もしも、一夏がこの日散歩などに行かず皆と模擬戦を  
していたらこの女性とも会わなかった。

そしてあんな事にもならず済んだであろう。

少年の心にあるものは何なのか？

それは少年が気づくべきではないものなのかもしれない。

第十話　その胸に抱く感情（後書き）

こんにちわ〜ケンです。

ようやくテストも残り一日です。

でもその後に校外学習が・・・  
めんどくさいです。

それはさておき如何でしたか？

感想もお待ちしております。

では、さよなら〜



## 第十一話 裏切り

一夏はベッドで横になりながらスコールに言われたことを考えていた。

「俺があいつらに抱いてる感情？別にあいつらは唯の友達だし、これといって仲が悪いという事でもない。」

まあ、たまにうざいとは感じるけどそれ以外は特に「ちなみに現時刻は6:30。」

昨日は早くに寝た為こんな時間に目が覚めてしまったわけである。

「一夏、朝稽古に行くぞ！」

静かだった部屋に凜々しい声が響いた。

「またかよ。そんなにお前は俺に強さを見せつけたいのかよ」

「今日は起きているな。では、行くぞ！」

「行くこと前提かよ。は〜うぜえ」

そそくさと服を着替えているとある事に気付いた。

「あれ？俺さつきあいつにうざいって思ったよな。」

「いらいらもしてるし。ま、いっか」

そのまま剣道場へと歩いていった。

「面！」

「うえ！」

「だらしないぞ！一夏！前から思っていたが最近、不摂生なのではないか？」

「は？」

「目の下にくまも出来てるし、この前のテストも遊び呆けていたのではないのか？」

「お前に何が分かるんだよ。俺は人より何倍もしなきゃ出来ないんだよ！」

「何でもできるお前と一緒にするな！」

「聞いているのか、一夏！」

「ああ、聞いているよ」

「それに剣道の腕も鈍っているのではないか。それでは、いつまで経っても、あの頃のように勝てんぞ！」

「あの頃……めんど」

「一夏は防具を脱ぎ更衣室へと歩いていった。」

「おい、一夏！どこに行く！」

「帰るんだよ。やってても意味ないだろ？」

「どういう意味だ」

「運動つてのは才能がある奴がするもんなんだよ。俺みたいに才能がない奴は、

やってもやらなくても同じ。時間の無駄」

「お前は努力の何を知っている。努力は人を裏切らない！」

「それは才能がある奴だけに言える事だ。それに努力なんてもんは無駄なだけだよ」

「そんな事はない！」

「そうなの。俺は体験したから言えるの」

「だ、だが」

「だがもへつたくれもないの。じゃあな

もう俺を誘わなくても良いぞ。遅れるなよ」

「い、一夏……」

「あゝいらつく。朝からいらつくとか最悪だ。」

「あいつは経験した事がないからそう言えんだよ」

「廊下を歩いていると何人かの女子生徒の声が聞こえてきた。」

「朝っぱらからうつせえな。教室でしゃべれよ、教室で」

「そのままいらつきながら教室へと向かっていった。」

「あ、おはよう一夏！」

「おはよう」

「凄い寝癖だよ？直してこなかったの？」

「良いだろ？別に俺は気にしない」

「一夏が気にしなくても周りは気にするよ。ほらまだ時間もあるから直してきなよ」

「めんどくさいからいい」

そのまま一夏は座ると机につっぷし眠りに入った。

つぎに目が覚めたのは頭に鈍痛が走った。

「痛！」

「馬鹿もの！いつまで寝ている、授業を始めるぞ。号令だ」

「はいはい。起立、礼、着席」

休憩時間になりトイレに向かっていると

女子たちの喋り声が聞こえてきた。

「いらつく。教室でしゃべれよ」

そのまま通り過ぎようとしたが自分の名前が聞こえ足を止めた。

「ねえ、織斑君てさずるくない？」

「あ、分かる〜男だからって専用機渡されてさ〜」

「そうそう。それに噂によると織斑君、IS使えなくなったらしいよ」

「え！本当？」

「ほんと、ほんと」

彼女たちの言うとおり一夏は授業中に展開しようとしたが白式が起動できなくなっていた。

しかし、訓練機は使えたので追い出されはしなかった。

「はは！じゃあ、織斑君がここにいる意味ないじゃん！」



一夏は着替え言われた場所に行くと思塗りの外車があった。  
そこには老人が一人立っていた。

「織斑様ですね？」

「ああ」

「お待ちしておりました。お乗りください」

車に乗り1時間ぐらい走りある場所で下ろされた。

「スコール」

「は。い。待つてたわよ」

「何でこんな所に」

「私は亡国機業ファントムタスクなの」

「あつそ。それで？」

「驚かないのね。いいわ織斑君、亡国機業ファントムタスクに入りなさい

そうすれば力が手に入るわ。どうする？」

「そんな事を聞くなよ」

「ふふふ、ようこそ！亡国機業ファントムタスクへ歓迎するわ織斑君」

一夏はスコールの手を取った。

少年の運命が動き出した

第十一話 裏切り（後書き）

こんにちわ、ケンです。

ようやくテストが終わりました。

如何でしたか？

一夏がとうとう亡国機業に入りました。

では、さよなら〜

## 第十二話 変わっていく日常

今、一夏はスコールに連れられ建物内部にいた。

「ここは何なんだ」

「ここは亡国機業ファントムタスクの内部よ」

「だが、表には株式会社と書いてあったが」

「それは表向きよ。表で金を稼いでその金を裏で使うのよ」

「そう言う意味か」

「ええ、まあね。ここに入るわよ」

スコールがドアを開けるとそこには一人の女性が機械をいじりながら聞いてきた。

「遅かったなスコール。人材とやらは連れて来たのか？」

「ええ、連れて来たわ。ひとまず見て頂戴」

「ああ、わか・・・お前、何でここに!!」

「オータムだったか？」

「呼び捨てしてんじゃねえよ!くそ餓鬼!」

「まあまあ、二人とも落ち着きなさい」

「お前の言っていた人材つてのはこいつの事か!」

「ええ、そうよ。期待の新人さんの織斑一夏君」

「何でこんな奴を」

「彼はねIS学園に恨みがあるのよ」

「信じれるか!」

「んゝ頑固ね。まあ良いわ、ひとまず織斑君は今日のところは帰きなさい」

「ああ、分かった」

「また後日、連絡するからその時は今日来た所に来て頂戴。迎えを置いておくから」

「分かった」

そのまま一夏は帰って行った。

「スコール！何であんな奴を裏側こっちに入れんだ！あいつは表側あっちの人間だぞ！」

「それは過去の話よ。分からなかった？彼のIS学園って聞いた時の雰囲気、今までとは違ってたでしょ」

「そ、それはそうだが」

「まあ、そのうち信じられるようになるわよ」

一夏はその後IS学園に戻り、授業をさぼって怒られた事以外には何も

無かった。いつものメンバーに聞かれたりもしたが適当にあしらっていた。

そして何事もなく夜を迎え眠った。

「ここはどこだ？」

一夏は今、自分の知らない場所にいた。

辺りには何も無い。

「ここは貴方の心の中のようなもの」

「誰だ、お前は！」

「んもつ！そんなに殺気立たなくても

いいじゃない。私は貴方なのに」

「何？」

「違うわね。貴方の闇って言うべきかしら」

「俺の闇？」

「そう、貴方が彼女たちに抱き続けた負の感情が集まり私が出来たの」

「負の感情」

「そう。貴方が織斑千冬や専用機持ちのメンバーに抱き続けているものよ」

「そうか。で？何の用だ」

「ふふ、貴方に質問があるの」



「質問？」

「そう質問。貴方はどんな力が欲しい？」

「どんな力……」

「そう」

「俺はあいつらをぶちのめす力が欲しい！

全てを燃やしつくす炎のように何もにも消されないような力が！」

「ふふ、合格よ。また会いましょ？」

「お、おい待てよ！」

そのまま消え去ってしまった。

「ん？」

次に目を覚ますと朝日が眩しかった。

つまり今は朝という事になる。

「ふああああ〜今何時だ〜？7時ちようどか」

そのまま一夏は服を着替え食堂で朝食を食べて教室へと向かった。

「あ、おはよう一夏！」

「ああ、おはよ」

「朝っぱらからテンション高過ぎ。頭に響く」

「ねえ、一夏」

「ん？」

「今日の放課後に模擬戦しない？」

「は〜忘れたか？俺はもう専用機持ちじゃない」

「覚えてるよ。でも訓練機を使っても模擬戦は出来るでしょ？」

「あ〜つまりこいつは自分が一番訓練機のラファールを使えるから  
教えてあげるって事か」

「いやいい」

「あ、もしかして会長さんとの放課後特訓があったっけ？」

「〜そう言えばそんなのあったな。最近行っていないけど。これを使  
わせてもらうか」

「ああ、あったな」

「そっか、ごめんね」

「別に。で、要件はそんだけ？」

「う、うん」

「あっそ。んじゃ」

そのまま一夏は教室へと向かっていった。

「最近、一夏の態度がよそよそしく感じるのは気のせいかな？」

「そう言えば最近、生徒会も行ってねえな。忘れてた」

放課後

「こら、一夏君！遅刻よ」

「すみません」

「じゃあ、今日は」

「楯無さん」

「何かしら？」

「俺が専用機持ちじゃないって知ってますよね？」

「ええ、まあ」

「じゃあ何でまだやるんですか？」

「それは訓練機を使えば」

「訓練機は予約も大変です。ですので今日で終わりにしましょう」

「え？」

「楯無さんも生徒会で大変なのに訓練機するのは不可能です。

ですので特訓はもう結構です」

「い、いやでも」

「楯無さんも俺を鍛えるより箒を鍛えた方が楽しいでしょ？」

「……」

「図星ですね。俺を教えるときあくびとかしてましたもんね」

「あ、あれはつい」

「でも箒の時はそんなの一度もありませんでしたよね？」

「……」

「て言う事でもう結構です。今までありがとうございました」

そう言い一夏は帰って行った。

「夏君……」

アリーナには楯無のつぶやきがひどく聞こえた。

第十二話 変わっていく日常（後書き）

どうも、ケンです。

如何でしたか？

原作の一夏ってあんなに振り回されてんのによくキレないなとつくづく思います。

では、さよなら～

### 第十三話 死ねない訳

放課後の特訓をやめてから数日が経った。

あれから楯無が何度か一夏のところに説得に来たが楯無も諦めてもう来なくなった。

「は〜」

「どうかなさいましたか？会長」

「虚ちゃん」

生徒会室で虚と楯無が二人で駄弁っていた。

「そういえば最近、織斑君来ませんね。何かあったんでしょうか？」

「一夏君は・・・辞めたわ」

「え？本当ですか！」

「ええ、昨日一夏君の部屋に行ったらそう言われたわ。

もう俺は生徒会にもいかないって」

「最近、彼も色々とありましたから精神的にも疲れてるのでは？」

「そうかもしれないけど・・・」

「ここは放っておく方がいいかもしれませんね」

「そうかな〜」

一方その頃、一夏はスコールに呼ばれ亡国機業ファントムタスケにいた。

「何か用か？スコール」

「まあね、ひとまず今日と明日を使って貴方を鍛えるわ」

「俺を？」

「ええ、そうよ」

「どうやって」

「それは・・・」

「お前が私と闘うんだよ！」

上から声が聞こえた。

「オータム」

「呼び捨てすんなって言ってるんだろが！」

「アラクネ直ったのか？スコール」

「まあね。まだ、戦闘は無理だけど貴方を鍛えるぐらいはできるわよ」

「で、どうすれば良い？」

「生身で戦いなさい」

「は？」

「武器はそこら辺に落ちてるのを使えばいいわ。

また30分後に生きて会いましょう？」

「じゃあ、とつとと始めるぞ！くそ餓鬼」

「ああ」

ひさてと、貴方は本当に使えるか否か。試させてもらうわ、一夏君。スコールは別室のモニターで戦いの様子を観察していた。

オータムは蜘蛛のような足を使い一夏に向けて動かしたが

それを一夏は避けて足もとに転がってる銃を一丁取り発砲した。

「ぐっ！これISの武器かよ！」

ISの武器を生身で使うとなると普段はISによって中和されている衝撃が全てフィードバックする為かなりの激痛が走る。

「隙ありだ！」

「しまっ」

慌ててもう一度撃とうとするが遅かった。

「がはっ！」

そのままアラクネの足に吹き飛ばされ壁にぶつかった。

「ひやははははは、どうだ！お前みたいな餓鬼が来るとこじゃないんだよ！」

さっさとかえ・・・！！」

オータムは言いかけた言葉を思わず止めてしまった。



「凄いわ」

「スコールか」

「まさか生身でISをここまで追い詰め、そしてあの殺気。ふふふ、やっぱり私の目に狂いはなかった」

「こいつを入れるのか？こっちへ」

「ええ、さっきの戦いで貴方も認めただでしょ？」

「まだ、認めてはいないがお前の目に狂いはないんだろ？なら、こっちは何も言わないがあいつがなんて言うか」

「エムか・・・まあ彼女も認めるでしょ。」

「ひとまず彼を医務室に運びましょう？」

「ああ」

そのまま一夏は医務室に運ばれ一命を取り留めた。

動き出した少年の運命

少女達はそれに気付かず日常を過ごす。

ただ一人を除いて。

やがて、この少女は大きな選択をする。



第十三話 死ねない訳（後書き）

こんばんわ〜ケンです。

人が傷つくことには人はとても鈍いです。

作者も経験した事があります。

如何でしたか？

というより亡国機業に医務室とかあんのかな（笑）

あるという設定でお願いします。

それではさよなら〜

## 第十四話 全てを燃やしつくす炎

「夏は夢の中にいた。」

「また、ここか」

「はい。お久々」

「お前」

あの時の少女が現れた。

「また会ったね。まあ、私が呼んだんだけどね」

「で？今度は何の用だ？」

「貴方に質問よ。どうして貴方は白式を使えなくなっただと思っ？」

「そんな事はどうでも良い。もう過去の話だ」

「あら、冷めてるはね。まあ良いわ教えてあげる。貴方の心の闇、

つまり私が生まれて白式を侵食したからよ」

「そうか」

「それともう一つ質問があるの」

「何だ？」

「貴方はどんな力が欲しい？」

「力……」

「そう」

「俺はあいつらをぶちのめす力が欲しい！

全てを焼き尽くす炎のような力が欲しい！

その為なら何だってしてやる！」

「ふふふ、分かったわ。また会いましょ」

「ちよっと待て！お前は誰だ！」

「私は　よ」

「ん？ここは」

目が覚めると包帯を巻かれた状態でベッドに横たわっていた。

「ここは医務室だ」

「オータム」

「お前、ほんとに死にかけてんだぞ。医者が言うには一度心臓が止まったらしい」

「そうか。それより今何時だ」

「今日は日が開けて日曜日の夜中だ」

「そうか・・・お前、1日中いてくれたのか？」

「けっ！馬鹿言うな、スコールが用事で留守だから私がしてるんだ」

「そうか」

「まだ寝てる。明日も鍛えるんだからな」

「ああ、そうする」

再び一夏は意識を落とした。

翌日

「あら、おはよう。二人とも」

「ああ、おはよう」

「ああ」

上からオータム、一夏である。

「元気そうね、一夏君」

「ああ、お陰さまでな」

「じゃあ、今日はISを使って鍛えましょう。担当は私がするわ」

「・・・そうか」

そう言いガントレットに手を当てた。

「展開してくれよ」

「白し！！」

一夏が展開しようとした時、突然ガントレットから黒い炎が噴き出した。

「な、なに！？」

「何だ、それは！ガキ！」



そこらの代表よりも強いスコールの攻撃を全部避けてる事態が凄いがあいつは何で何もしない。

「いつまで、避けてるつもりなのかしら!？」

攻撃しないと勝てないわよ!」

「・・・そうだな。ようやくこいつの

全てを理解したから仕掛けるか」

そう言い一夏は黒炎で刀を形成しスコールに切りかかるがスコールはそれを剣で防いだ。

「どうしたの?こんなもの?」

「そう焦るな」

その瞬間、炎が剣を伝ってスコールのISに燃え移った。

「な、何なの!?!この炎。消えないじゃない!」

「そいつは黒幻の単一仕様能力のブラックファインチキアピリデー  
そいつんしゃ

操炎者により生まれたエネルギーを喰らう炎」

「エネルギーを喰らう炎?」

「そうだ。そいつがISに着火すればエネルギーを喰らいつくすまで、

消える事はなく喰らえば喰らうほど勢いは強くなる。

単純に炎としても扱える」

説明通り炎は喰らい続けスコールの

ISのエネルギーはさらに減少スピードが跳ね上がった。

「・・・負けたわ」

スコールが負けを認めたと同時に一夏は炎を消した。

「凄いわね、そのIS」

「まあな、でも欠点もある」

「欠点だと?」

先程まで避難していたオータムも話に加わった。

「ああ、黒幻こくごはこれしか武装がない」  
「つまり逆に言えば武装を追加できないの？」  
「ああ、使うならできるが拡張領域バルスロットが無いから  
使い捨てないといけない」  
「それで能力が他を圧倒してるのね」  
「まあな」  
「だが、これからどうすんだ？」  
「何がだ？」  
「お前はIS学園に在学してるから授業で  
展開しないと怪しまれるぞ」  
「ああ、その件は大丈夫だ」  
「どうして？」  
「こいつの構造は白式と同じだ。それに俺は白式を  
展開できなくなってるから怪しまれることはない」  
「ちょよ、ちょっと待て！」  
「何だ？」  
オータムが声を荒げた。  
「だったらお前は昨日の特訓で絶対防御無しで戦ったつてのか！」  
「ああ、まあな」  
「は〜そう言う事は早めに言いなさい。特訓も内容を変えたのに」  
「そうだな」  
「ま、ひとまずは力も手に入れた事だしオータムは良いわね？」  
「ああ、文句はない」  
「????」  
「織斑一夏君！」  
「なんだ？」  
「改めて歓迎するわ、ようこそ亡国機業ファントムタスクへ！」  
「ああ！」  
一夏はスコールの手を取り握手をかわした。

この日、この世界からある物が消失しあるものが出現した。  
それは誰も気づかない事。

ここから少年の復讐劇は始まる。  
美しかった白は消失し、全てを闇に染め全てを燃やしつくす黒が現れた。

白の消失、黒の出現。

第十四話 全てを燃やしつくす炎（後書き）

こんにちわ

如何でしたか？

ようやくオリエンスを出せました

設定も近く出します。

それではさよなら



## 第十五話 少年の諦めと少女の涙

あれから一夏はメデイカルチェックを終えてIS学園に帰ろうとしていた。

「ちよつと待ちなさい。一夏君」

「何だ、スコール？」

「貴方にはこれから任務を言い渡すわ」

「任務？まさかIS学園の内部データでも流せとか？」

「あら、感が良いわね。正解よ」

「それだけ？」

「後、月一で良いからこつちに顔を出して頂戴。」

その時に任務があれば言うわ」

「分かった」

そのまま一夏は車に乗り帰って行った。

「お疲れ様でした。織斑様」

「ああ、貴方もありがとう」

一夏は学園の帰路の途中でいつものメンバーと遭遇した。

「げ！何であいつらがここにいるんだ！」

一夏は見つからない内にその場から離れようとするが・・・

「あ！一夏！！」

「は〜最悪」

案の定見つかった。

「こんな所にいたか。どこにいたんだ、昨日は！」

「俺の勝手だろ」

「嫁は夫と共にいると聞いたぞ！」

「誰だよ、こいつに間違った日本のオタク文化を入れた奴」

「でも、本当にどうしたの一夏？」

シャルが心配そうに聞いた。

「は〜昨日は宿泊届を出したんだけど」

「何よ〜言ってくればいいじゃないの!」

「そうだぞ、一夏!」

「そうですね、一夏さん!」

上から鈴、篝、セシリアである。

「何でお前らに俺の予定を言わなきゃならん。お前達は俺の何なんだ?」

「放っておけよ。俺の勝手だろ」

「まあいい。ひとまず学園に戻るぞ」

ラウラが一夏の手を持って引きずり始めた。

「馬鹿言つな。俺はまだ用事があるんだよ」

用事と言っても家の掃除だが・・・

「異論は認めんぞ!お前には聞きたいことが山ほどあるからな」  
そのままいつものメンバーに学校まで引きずられてしまった。

一夏の部屋

「で、何か用?」

部屋にはいつものメンバーと楯無となぜか千冬がいた。

「何かじゃないわよ!あんた最近おかしいわよ」

「そうだぞ一夏」

幼馴染の二人が声を荒げた。

「別に何も変わってないけど?」

「変ったよ!急に僕たちとは模擬戦はしなくなるし

会長さんとの特訓も辞めちゃっし

生徒会も辞めちゃったし、何かあったの一夏?」

シャルが心配そうに見つめた。

「別に何も無い。ただ強いて言うなら気づいたただけかな?」

「何に気付いたのかしら?」

楯無が質問した。



誰も一夏に反論できなかった。

「話は終わりか？なら出て行ってくれよ。俺寝るから」

そう言い一夏は寝間着に着替えて布団に入ってしまった。

まだ数分後には全員、残っていたが一人また一人と出ていき最終的に一人を残して出て行ってしまった。

「何か用か？簪」

「一夏、何かあったの？」

「さっきも言っただろ？何も無い、ただ気づいただけ」

「それでも！それでも前の一夏なら諦めずに努力してた！

私にも前にそう言ったのに、何で自分は諦めちゃうの？」

「簪……」

簪は涙を流しながら一夏に訴えていた。

「ねえ、もうちょっと頑張ろうよ。また皆と特訓しようよ」

「簪、俺はもう何やっても意味ないんだよ。」

勉強もISも何もかも意味ないんだ」

「何で？何でそう考えるの？」

簪は何度も手で涙を拭うがその動作が意味を為さないほど涙があふれていた。

「簪」

「え？」

一夏は泣いている簪をそっと抱き締めた。

「い、一夏？」

好きな人に抱きしめられ思わず簪は顔を赤くしてしまった。

「簪。お前はこれから頑張っていけ。お前には俺と違って

才能もあるし勉強も出来るし何より、

お前には超えたい人もいるんだろ？」

「うん」

「だったらこんな所で俺に合わせて止まるんじゃないやなくて進み続ける。そうすれば必ず超える事が出来る」

「なら一夏も一緒に進もうよ」

「いいや、俺は最初から無駄だったんだ。何もかも。生まれたことすら無駄だったんだ」

その言葉を聞いて簪は一夏の頬を叩いた。

「一夏の馬鹿！もういい！一夏なんか知らない！」

そう言い残し部屋を出ていった。

『よかったの？』

「ファントム」

『あの子ならこっち側に連れてこれたんじゃないの？』

「いや、あいつはこっちに来てはならない。きつとあいつは

これからたくさんの人々に囲まれて生きていく。

そんな奴を潰す訳にはいかない。あいつだけはな」

『ふん。良かった、貴方の憎しみの炎は消えてないみたいね』

「当たり前だろ。俺はあいつらをぶちのめす！何があってもな！」

『ふふふ、それで良いわ。それでこそ貴方よ』

「ああ、俺はあいつらを必ずぶちのめす！」

第十五話 少年の諦めと少女の涙（後書き）

こんばんわ〜如何でしたか？  
それでは、さよなら〜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5542x/>

---

インフィニットストラトス 白の消失、黒の出現

2011年10月22日23時45分発行